

# 育児観・子育て観と育児不安・子育て不安の 研究動向と要因についての検討

京 藤 広 果

## 問 題・目 的

働く母親が増加している現在において、本保・八重樫（2003）によると、家事と子育てと仕事と言う過重負担が問題になってきていると指摘した。その中でも育児不安が重要な要因となっていると考えられた。育児不安とは、核家族化、地域との交流の希薄化、育児の孤独化などを背景に育児に対して持つ否定的な感情である。

そのような育児不安の検討するにあたって、加藤（2002）によると、育児の負担感や育児不安について考えるとき親にとっての子育ての意味である子育て観は重要な位置を占めていると思われた。育児不安などの母親の育児負担軽減に向けて、政府や地域では様々な育児支援等の取り組みが行われているが、母親たちの育児の困難さや育児不安は減少しているとは言い難い。母親がどのような支援を求めているのか、子育て支援について再検討する必要があると考えられる。

本研究は1980年代から2020年代の育児観・子育て観、育児不安・子育て観の文献を対象とし、研究の動向と要因の変化について検討することとした。研究1では育児不安の研究が盛んになった1980年代から現在に至るまでの育児観についての文献の研究テーマについて検討し、細分化した育児観・子育て観の要因からどのような変化があるのかを検討することを目的とする。研究2では、1980年代から現在に至るまでの文献の研究テーマについて集計し、細分化した育児不安の要因から育児観・子育て観との関連を見るときにも支援のあり方について検討することを目的とする。

## 方 法

### 【研究1：育児観・子育て観の研究動向と要因について】

- 1) 研究対象：1980年から2020年における「育児観」「子育て観」をキーワードとする文献
- 2) 収集期間：2021年9月
- 3) 方法：検索サイトCiNiiを用いて、「育児観」「子育て観」をキーワードに指定し、国内の研究論文を検索した。ヒットした論文のうち、紀要・学会誌に掲載されている論文を研究対象とした。また、内容が重複しているものや本研究の趣旨と異なる論文は除いた。

### 【研究2：育児不安・子育て不安の研究動向と要因について】

- 1) 研究対象：1980年から2020年における「育児不安」「子育て不安」をキーワードとする文献
- 2) 収集期間：2021年9月
- 3) 方法：検索サイトCiNiiを用いて、「育児不安」「母親」をキーワードに指定し、国内の研究論文を検索した。ヒットした論文のうち、紀要・学会誌に掲載されている論文を研究対象とした。また、内容が重複しているものや本研究の趣旨と異なる論文は除いた。

## 結 果

## 【研究 1：育児観・子育て観の研究動向】

本研究では、1980 年以降の育児不安に関する研究の動向を考察するために、「育児観」「子育て観」「母親」をキーワードとして研究論文を検索した。その結果、ヒットした論文の 58 件のうち、紀要・学会誌に掲載されている論文である 28 件が研究対象の文献となった。

育児観・子育て観の要因は大きく 5 つにわけることができた。また、各要因の内容の分類を行なった。(表 1)

表 1 育児観・子育て観の要因

分類	内容
ライフステージ	家庭での母親 結婚・仕事をする女性
性役割	性役割意識 性役割分業行動
子ども	子どもの特徴 親の希望
サポート	パートナー、友人・祖父母、ソーシャルサポート
青年期男性・女性の育児観・子育て観	ライフコース 性役割 親の影響

次に 5 つに分類した要因の内容について、1980 年代、1990 年代、2000 年代、2010 年代と 10 年ごとに分類した。(表 2)

表 2 育児観・子育て観の要因内容 (年代別)

			年代			
			1980 年代	1990 年代	2000 年代	2010 年代
要因	ライフステージ	家庭での母親	1	1	0	0
		結婚・仕事をする女性	0	0	2	2
	性役割	性役割意識	0	0	4	1
		性役割分業行動	0	0	1	1
	子ども	子どもの特徴	0	1	0	2
		親の希望	0	0	1	4
	サポート	パートナー、友人・祖父母、ソーシャルサポート	0	1	1	1
	青年期男性・女性の 育児観・子育て観	ライフコース	0	0	1	1
		性役割	0	0	1	1
		親の影響	0	0	1	3

## 【研究 1：育児観・子育て観の要因について】

分類した育児観・子育て観の各要因の内容について、検討していく。

## ライフステージ

家庭での母親について、育児重視であり実際に無職で育児に専念している人では、家庭内での母性意識が高く、特に母親が家庭教育について指導的役割を果たしている率が高かった(副田・柏木, 1980) 一方で、仕事を重視し仕事をしている人では家庭教育において祖母が共同で当たることが多く、無職の人より育児に対して肯定的で

あった。

結婚・仕事をする女性について、坂本・古橋（2006）によると、結婚しない生き方を選択した女性は、育児に対する不安は低く、充実感ややりがいを見出せずにいることが特徴であった。また、親としての自信のなさや社会からの孤立など育児に対する不安を抱えていることが明らかとなった。

#### 性役割

性役割意識について、父親の方が男女の性役割意識、親が育児に専念すること、子どもが跡継ぎであるなどの伝統的な親役割観を抱えていることが考えられると示唆された。また山瀬（2002）は、母親は仕事を持つ父親に育児参加を求めるのは父親に負担がかかりすぎていると考えていたことが示された。

性役割分業行動において、久保（2009）は共働き家庭においても、子どもに体調不良が生じたときは働く母親が仕事を休み体調不良児の対応をすると言うジェンダー意識が父親のみならず働く母親にも備わっていることが判明した。

#### 子ども

子どもの特徴について、阿部・太田・神名・石井（2013）によると、障害のある子どもを持った親たちはその兄弟に同胞の世話をし親を助けてくれる存在、同胞の存在を肯定的に捉える自慢の子どもでいて欲しいというように、手のかからない良い子としての兄弟像を期待していることがうかがえた。

親の希望について、佐野・我部山・池田・宮崎・矢野・杉本（2002）によると、子どもに対する期待や教育方針は「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしくしつけた方が良い」と回答したのは母親よりも父親の方が有意に高く、伝統的な考え方を有していた。

子どもに期待する進学先として、田中・矢野・松島・猪野・坂口・加瀬（2017）によると、1995年の時点では大学まで進学してほしいと答えた割合が4割で最も多いものの、2015年になると約7割の親が大学まで進学してほしいと答えたと報告された。

#### サポート

サポートについてはパートナーとの関係が主であったが、友人・祖父母、ソーシャルサポートについても検討されていた。

夫婦関係について、大西・良村（1997）によると夫との安定とした関係及びサポートは母親役割の受容にとって重要であることが明らかとなった。ソーシャルサポートについては、片山・内藤・佐々木（2012）によると、子育て満足感生きがいの間に弱い相関、子育て不安感負担感と弱い負の相関を示した。

#### 青年期男性・女性の育児観・子育て観

青年期男性・女性の将来のライフコースについて、八重樫・奥山・林・本保・小河（2001）は、理想のライフコースではほぼ半数の女子大学生が出産後も仕事をしたいと思っているが、現実には3分の1であると報告した。

性役割について、井梅（2019）によると、伝統的な性役割観を反映するような項目については男女ともに低い値を示していたが、男性が一家を養うという価値観は依然としてみられた。

親の影響について、井梅（2019）によると、親の夫婦関係は1番身近にある夫婦のモデルであり、また子育てにおいて自らの親との関係は自身の子育て観に影響を受けるだろうと指摘した。

将来の就労の意識において日下部（2009）によると、就学前に母親が就労していた群は出産後の母親が仕事を継続することが望ましいという回答が有意に多かった。

#### 【研究2：育児不安・子育て不安の研究の動向】

本研究では、1980年以降の育児不安に関する研究の動向を考察するために、「育児不安」「子育て不安」をキーワードとして研究論文を検索した。その結果、ヒットした論文の156件のうち、学会誌に掲載されている論文である65件を対象とした。

育児不安・子育て不安の要因は大きく3つに分類することができた。また、各要因の内容の分類を行なった。（表3）

表 3 育児不安・子育て不安の要因

要因	内容
子どもの要因	子ども数 子どもの年齢 子どもの発達 子どもの気質や性格などの特徴
母親の要因	母親の年齢 出産経験 母親の性格や認知 母親のライフコース
サポート	社会的サポート パートナーとの関わり パートナー以外の関わり

次に3つに分類した要因の内容について、1980年代、1990年代、2000年代、2010年代、2020年代と10年ごとに分類した。(表4)

表 4 育児不安・子育て不安の要因内容 (年代別)

			年代				
			1980年代	1990年代	2000年代	2010年代	2020年代
要因	子どもの要因	子ども数	0	1	1	0	1
		子どもの年齢	0	1	3	4	2
		子どもの発達	3	0	5	4	0
		子どもの気質や性格などの特徴	0	0	3	3	0
	母親の要因	母親の年齢	0	0	1	1	1
		出産経験	0	0	1	3	0
		母親の性格や認知	0	0	5	6	0
		母親のライフコース	0	0	4	2	0
	サポート	社会的サポート	0	1	2	1	0
		パートナーとの関わり	0	0	4	0	0
		パートナー以外の関わり	0	0	0	4	0

表中の2020年代とは2020年～2021年の1年間のことである。

## 【研究2：育児不安・子育て不安の研究の要因について】

分類した育児不安・子育て不安の各要因の内容について、検討していく。

### 子どもの要因

育児不安と子ども数において、足立(2021)は第1子の母親の場合は慣れない育児を初めて行うことによる負担、第2子以降の母親の場合は複数の子どもの育児を初めて行うことによる負担があった。また、西原・服部・小林・早川(2006)によると、双生児の母親は児の年齢が高くなるにつれて子育てに困難を感じているものが多かった。

子どもの年齢について、乳児を持つ母親の不安として、こだわりや不規則な生活リズムなどの気質特徴を持つと評価した母親の育児不安が有意に高く(武井・寺崎・門田, 2008)、高橋・瀬地山・本城(2014)によると養育者の育児のために自分の行動や時間に制限を感じる不安が幼児の神経質と規則性が影響を及ぼしていることが明らかになったと示した。児童期の子どもを育てる母親の育児不安の内容について、岡崎・安藤(2018)は、学校での適応や子どもの身体的健康面より性格、発達、行動上の問題が気がかりであり、保護者自身の子どもへの対応に不安を感じていたことを明らかとした。

子どもの発達について、山口・遠藤（2009）によると低出生体重児を持つ母親は成熟児に比べて育児不安が高いことが示唆された。発達障害を持つ母親について山本・神田（2011）は子育て不安得点、学校関連不安得点が高かったと報告している。

子どもの気質・性格の特徴について、情緒反応の激しい子ども（興石，2002）、否定的感情反応の強い子ども（門田・寺崎・奥富・武井・竹内，2017）、次にどのような行動するか予測ができないようなフラストレーション・トランスを持った子ども（菊野・菊野，2015）などがあげられた。

#### 母親の要因

母親の年齢について、村上・飯野・塚原・辻野（2005）は母親の年齢が高くなるにつれ育児ストレスが高く、体的問題も抱えていたと報告した。また、その中でも松井・和泉・金谷・岩佐（2020）は35歳以上の母親の育児不安に関する要因として、35歳未満と比較すると、母親自身の睡眠状態や精神的な健康状態が育児不安に関係していたことが報告された。

母親の出産経験の違いについて、服部（2007）によると初産婦と経産婦で差が見られ、初産婦の方が育児に自信が持てない傾向であった。育児不安の内容として、橋本・江守（2010）によると初産の母親は多くの母親が同じ内容で不安が高い傾向であった。一方の経産の母親の心配は個々で抱えている心配項目が違う傾向であった。

育児不安を感じやすい母親の性格傾向として藤村・石（2013）によると、自己中心的で、情緒的に受容的で、社会的に消極的な傾向を持つことが明らかになった。また、育児不安の高い母親の特徴として、眞崎・田村・奥富・池田・岡野・中村・宗像・橋本（2012）や興石（2002）によると、自己価値観や支援認知が低く、自己抑制型行動特性が強いと考えられた。

母親の認知面や思考傾向による育児不安の影響として、興石（2002）によると、自己注目傾向の高い母親において、対処不能感が高まった場合、自己について考え込んでしまいやすい状態にあり自己や状況に対しての見方がよりネガティブになりやすく育児不安も高まったと報告された。

育児は母親がするものという性役割意識の偏りについて、片山・奇（2007）は母親になることは社会的存在としての意味を含めた自己のあり方の変化であり、その受容と適応の過程において子育て不安が生じうると考えた。

母親のライフコースの研究の多くは就労に関するものが多かった。宮本（2009）は、どのライフコースにとっても過去・現在・未来に対する肯定的な意識を高めることは育児不安を軽減することにつながると報告した。また、希望したライフコースと一致している場合に育児不安が低いのは、就業継続している、再就職をしたなどの有職の母親であった。育児不安を高く感じる捉え方について、宮本（2019）は現在において充実していない母親は育児不安が高いことが明らかとなった。

#### サポート

社会的サポートについて、育児不安得点の高い人の母親は、岡本（2003）は、ソーシャルサポート得点の低い母親に多かったと報告した。浅井（2019）によると、地域子育て支援拠点利用後に子どもの生活や遊びに対する不安が緩和されたことがわかった。

パートナーとの関わりについて、育児不安軽減の影響において、岡本（2003）によると夫が「育児の話」「育児の相談相手」「母親への気遣い」をしている場合に、育児不安得点の低い母親が多かったと報告した。

祖父母のサポートについて、八重樫（2020）は自分の祖母によるサポートのある人もストレス感等が低くなっていたと報告された。祖父母の支援以外にも、本田（2018）は、友人からのサポートが十分であれば実母への援助要請行動を必要としない可能性があることを指摘した。また、人との関わり以外にも母親自身が取り組む育児準備が育児不安に影響を与えていた。萩原・名取・平田（2017）によると、妊娠期に育児準備を行った者は、育児の準備に対する主体性や満足感を得ており、育児への自信も有意に高かった。さらに育児ストレスや育児不安が少なかったと報告された。

## 考 察

### 【研究1：育児観・子育て観の研究動向について】

育児観・子育て観の研究の動向について考察していく。

研究の合計件数をみると、現代になるにつれて研究が盛んに行われるようになったことが明らかとなった。「ライフステージ」の研究は 1980 年代から 2010 年代も変わらず研究が行われていたことから、育児観・子育て観は母親にとって一つのライフステージであるという認識が変わらず続いていることが示唆された。

### 【研究 1：育児観・子育て観の要因の内容について】

育児観・子育て観を 5 つに分類した要因の内容について考察していく。

#### ライフステージ

2000 年代になると、子育てを機に仕事をやめて家庭に入るといった専業主婦に対する考え方は時代とともに変化している一方で、社会からの孤立感の感じやすさが示唆された。またそのような変化は、山瀬 (2012) によると「子育ての悩みは子どもの育ちの悩みだけでなく育児を楽しめない自分、成長できない自分という自己の悩みの側面も持つ」ことに関係すると考えられた。

#### 性役割

育児を母親主体とするものという性役割観を持つ人は少数であったと考えられていたが、実際の育児場面になると母親は父親に育児参加を求めるのは負担がかかると考えていた。

#### 子ども

親が子どもに持つ希望として、親が子どもに期待することは性役割意識と関係していると考えられた。また、親の希望の研究が 2010 年代になって多くなったことについて、吉本 (2019) によると「母親の子育ての目標は目の前の子どもの姿に立脚するのではなく、外部による目標から選択し、それに向かって精進することであった」ことが考えられた。

#### サポート

サポートの研究では、パートナーとの関係が主であった。いずれの年代にしても、パートナーとの安定した関係及びサポートが育児の困難感を減少することが明らかとなった。また、パートナー以外にも友人や祖父、ソーシャルサポートといったサポートがあげられ、母親の周りにはさまざまなサポート源が必要であることが示唆された。

#### 青年期男性・女性の育児観・子育て観

青年期の性役割意識について、青年期女性では子育てへの期待や肯定感、子育ての不安感のどちらも女性の得点の方が高かったことから、母親が持っている育児観の肯定感や不安感は青年期女性の頃から持っているものだと考えられる。性役割について、青年期男性、女性にも伝統的な性役割意識は変化しているものの、育児をすとなると母親の役割が大きいと感じている傾向があり、性役割意識は根深く残っているものがあると考えられる。また、親の影響を最も受けていたものは将来の就労についてであった。母親の就労形態によって就労意欲が異なっていたことから母親の就労状況が青年期女性の就労や育児観・子育て観などライフステージに大きく影響していると考えられた。

### 【研究 2：育児不安・子育て不安の研究動向について】

育児不安・子育て不安の研究の動向について考察していく。

研究の合計件数をみると、現代になるにつれて研究が盛んに行われるようになったことが明らかとなった。「母親の要因」の研究は年々多くなったことから、母親の要因は育児不安・子育て不安に大きく関係していると考えられた。また、「サポート」の研究は母親の要因と同様に 2000 年代、2010 年になると増えてきたことから、母親の支援として様々なサポートが検討されているのではないかと考えられた。

### 【研究 2：育児不安・子育て不安の要因について】

育児不安・子育て不安を 3 つに分類した要因の内容について考察していく。

#### 子どもの要因

子どもの年齢が低いときは育児に費やす時間などが母親自身の不安につながっていたが、子の年齢が高くなるにつれて子どもへの期待度や感情が強くなっていった。

子どもの発達において、子どもの特徴から養育者は適切に対処できないために子育てそのものに対して自信をなくし、挫折感や育児への否定的感情が高まっていくこと、(村上・飯野・塚原・辻野, 2005), 養育者は相互作用遊びを行わなければ子どもを対処できると感じる機会を得られにくく、育児不安が高まり、育児満足が低下する可能性がある(門田・寺崎・奥富・武井・竹内, 2017)と推測されることから、親子での関わりにも影響しており、それがまた育児不安に影響しているという可能性も考えられた。

#### 母親の要因

母親の年齢が高くなるにつれ育児不安が上昇する傾向であると考えられるが、母親の出生児平均年齢が上昇傾向であることで育児不安も変化していると考えられた。出産経験の違いについて、初産婦、経産婦ともに母親の育児上の問題は時間の経過とともに変化しており、各時期における支援の必要性が示唆された。母親の性役割意識について、一般的な母親らしさというある程度安定したイメージを母親は持ちながらも、それに囚われず一人一人の在り方やその違いを受容するといった柔軟な姿勢が子育て不安を理解することにつながるのではないかと考えられた。

母親のライフコースについて、将来に希望、母親が希望しているライフコースが一致しているかどうか、今までのライフコースを肯定的に受け入れるかどうかによって、育児不安が異なってくるのが考えられる。

#### サポート

サポートの研究について、パートナーが子どものことについてだけではなく、家事や相談相手になることが育児不安の軽減につながることを示唆された。

パートナー以外のサポートとして、母親の友達作りの場の提供や家庭外の活動へ参加できるような対策を行うことで、育児の悩みを共有しながら社会的な関わりを持つことができる支援の必要性が示唆された。また、妊娠期の育児準備行動は自己肯定感を生み出すことから、妊娠期からもサポートが重要になってくるのではないかと考えられた。

### 【育児観・子育て観と育児不安・子育て不安の関連について】

#### 1. 母親のライフコースの変化と子どもの年齢・発達・気質の関連について

母親であることのみが生き甲斐ではなくなったライフコースの変化に伴い、母親の育児をすることへの意味合いが自己評価と重なったことによって、母親の子どもに対する期待や要求と子どもの発達や気質のずれが育児不安につながっていると示唆される。

そのような育児不安の軽減する取り組みとして、子どもの気質の個人差に関する情報や知識、具体的に生じやすい問題行動や対処法についての心理教育を行うこと(高橋・瀬智山・本城, 2014)や、正しい育児知識と個性を考慮した適切な情報提供や対処法を考える(渡辺・石井, 2005)などのサポートを行うと育児不安の軽減につながるのではないかと考えられる。また、実際に育児準備についても様々な機関によって出産準備教育の違いがあり、妊娠中だけでなく産後までを視野に入れ、妊婦を取り巻く家族を含めた学級作りが求められていると示した。

#### 2. 母親の性役割意識と母親の性格との関連

性役割に関して性役割意識をもつ者は少なくなっているものの、実際の育児場面になると育児において母親役割が重視された。しかし、育児不安が高い傾向にある母親の性格について、サポートの要求を出しにくく、育児不安が高くなっている可能性が考えられる。

そのような育児不安の軽減する取り組みとして岡本(2015)によると、地域子育て支援拠点事業を利用して、母親が多様な人とのつながりを作る事を援助する拠点の取り組みが育児不安の中核的な部分の軽減につながっていくと指摘した。しかし、丸谷(2016)は、子育ての仲間は、子どもの成長をきそう競争相手という側面もあり、仲間の中にいながら劣等感を募らせる場合もあると示した。子どもの成長が母親の自己評価につながるというように、母親同士のつながりを作るなかで劣等感に陥ることや育児不安が高い母親の特徴として自己肯定感が低いことから、母親の性格傾向も考慮しながら支援を行うことが大切なのではないかと考えられた。

#### 3. 青年期男性と育児不安について

青年期男性・女性の育児観について、坂本・古橋(2006)は育児や子どものことを肯定的に捉えているが、親

としての自信のなさや社会からの孤立など育児による不安も同じように感じていたと示した。また、大学生における子どものイメージについて、子どもとの接触体験が少ないほど子どもの行動特性からくるイメージは否定的であった。

看護学生に地域の親が子育て体験を語るワークショップを行ったところ、今村・山口・光盛・鍋島 (2010) は子育てを遠観的に捉え否定的イメージから肯定的イメージと変化させるとともに、子育て支援の必要性に学生自らが気づいていたことが明らかにした。このことから青年期から、子ども・子育てや子どもの特性の理解を促進することで、青年期男性・女性が親になるときの育児不安が軽減するのではないかと示唆された。

#### 引用文献

- 阿部美穂子・太田千裕・神名昌子・石井郁子 2013 「障害のある子どものきょうだいを育てる親の子育て観の変容：家族参加型支援セミナーの参加を通して」 富山大学人間発達科学部紀要 8(1), 85-99
- 足立安正 (2021) 「産後 1 か月の子育て状況と産後 6 か月の母親の育児不安との関連～第 1 子と第 2 子以降の違い～」 摂南大学看護学研究 9(1), 11-20
- 浅井拓久也 (2018) 「地域子育て支援拠点の子育て支援に対する利用者満足度に影響を及ぼす要因」 秋草学園短期大学紀要 (35), 1-13
- 藤村和久・石曉玲 (2013) 「保育者特性検査の妥当化 II：育児不安、自己観および YG 性格検査との関連性」 大阪樟蔭女子大学研究紀要 (3), 63-71
- 児不安に与える影響」 山梨県立大学看護学部研究ジャーナル (3), 37-44
- 橋本美幸・江守陽子 (2010) 「産後 12 週までの母親の育児不安軽減を目的とした指導内容の検討」 小児保健研究 69(2), 287-295
- 服部律子 (2007) 「双子の母親の育児不安に影響する要因：不妊治療と育児の実態」 母性衛生 48(1), 38-46
- 本保恭子・八重樫牧子 (2003) 「母親の子育て不安と父親の家事・子育て参加との関連性に関する研究」 川崎医療福祉学会誌 13(1), 1-13
- 本田真大 (2017) 「育児不安に焦点を当てた母親の子育ての悩みの援助要請行動に影響を与える要因の検討」 北海道教育大学大学院研究紀要 (15), 11-21
- 副田素子・柏木恵子 (1980) 「女性の職業志向性に及ぼす母親の影響」 東京女子大学紀要 (31), 213-238
- ことによる看護学生の子育て観への効果」 日本小児看護学会誌 20(1), 107-112
- 井梅由美子 (2019) 「大学生の結婚観、および子育て観について：－自身の被養育体験、父母との関係性、対象関係に着目して－」 東京未来大学研究紀要 13(0), 11-21
- 門田昌子・寺崎正治・奥富庸一・武井祐子・竹内いつ子 (2016) 「子どもの気質と関連する遊びが養育者の遊びにおける対処可能感を介して育児不安、育児満足に及ぼす影響」 パーソナリティ研究 25(3), 206-217
- 片山綾子・奇恵英 (2007) 「母親の自己イメージと育児不安に関する研究」 臨床心理学 (4), 15-20
- 片山理恵・内藤直子・佐々木睦子 (2012) 「乳幼児の母親と父親のソーシャルサポートと子育て観の関係と育児休業利用の実態」 香川大学看護学雑誌 16(1), 49-56
- 加藤春子 (2002) 「母親の育児不安について」 人間福祉研究 (5), 93-107
- 菊野春雄・菊野雄一郎 (2015) 「子どもの気質と母親の心の理論が子育て不安に影響するののか」 静岡産業大学論集 21(1), 1-7
- 興石 薫 (2002) 「母子相互交渉の質と母親の育児不安及び子どもの言語発達との関連性について」 小児保健研究 61(4), 584-592
- 久保桂子 (2009) 「フルタイム共働き夫婦の家事分担と性別意識」 千葉大学教育学部研究紀要 (57), 275-282
- 日下部典子 (2009) 「母親の就労状況と親の育児行動が大学生の育児観に及ぼす影響」 福山大学人間文化学部紀要 (9) 99-107
- 眞崎由香・田村知栄子・奥富庸一・池田佳子・岡野真規代・中村多恵子・宗像恒次・橋本佐由理 (2012) 「SAT 療法による乳幼児をもつ母親の育児不安への支援」 Journal of health counseling 18, 1-9
- 松井菜摘・和泉京子・金谷志子・岩佐真也 (2020) 「4 か月児をもつ 35 歳以上の母親における育児不安とその関連要因：35 歳未満の母親との比較」 武庫川女子大学看護学ジャーナル 6, 23-3
- 宮本純子 (2009) 「乳幼児をもつ母親の育児不安と時間的展望との関係——ライフコースと生きがいの観点から」 九州大学心理学研究 10, 191-197
- 宮本純子 (2016) 「希望と現実のライフコースからみた乳幼児をもつ母親の時間的展望と育児不安の関連」 近畿大学九州短期大学研究紀要 (46), 73-88
- 宮本純子 (2019) 「アイデンティティ拡散傾向の母親の類型と育児不安との関連」 近畿大学九州短期大学研究紀要 145-153
- 村上京子・飯野英親・塚原正人・辻野久美子 (2005) 「乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析」 小児保健研究

- 64(3), 425-431
- 西原玲子・服部律子・小林葉子・早川和生(2006)「母親の育児不安と双生児の精神運動発達との関連性の検討：双生児と単胎出生児との比較から」日本公衆衛生雑誌 53(11), 831-841
- 岡崎由美子・安藤美華代(2018)「就学前後の子をもつ親の子育て不安・子育て支援に関する検討」(8) 193-206
- 岡本絹子(2003)「親子クラブに属する母親の育児状況と育児不安」川崎医療福祉学会誌 13(2), 325-332
- 岡本聡子(2015)「母親の育児不安解消における地域子育て支援拠点事業の効果：利用者アンケートを通じた測定と検証」創造都市研究 e 10 (1), 1-12
- 大西由紀子・良村貞子「伝統的母性観の影響下における母親の育児観：母親役割期待に関する調査から」北海道大学医療技術短期大学部紀要 (9), 1-12
- 佐野和香・我部山キヨ子・池田浩子・宮崎つた子・矢野恵子・杉本陽子(2002)母性衛生 43(2), 387-394
- 高橋靖子・瀬地山葉矢・本城秀次(2014)「乳児の気質と母親の育児不安との関連：妊娠時の愛着表象を防御因子として」小児保健研究 73(3), 429-436
- 武井祐子・寺崎正治・高尾堅司・門田昌子(2008)「養育者との面接からとらえた育児不安についての質的研究」川崎医療福祉学会誌 18(1), 219-225
- 田中敏明・矢野洋子・松島暢志・猪野義弘・坂口璃沙・加瀬朋子(2017)「幼児の生活と幼児を持つ親の育児観の変容：1995年と2015年との比較を通して」九州女子大学紀要 53(2), 25-42
- 渡辺弥生・石井睦子(2005)「母親の育児不安に影響を及ぼす要因について」法政大学文学部紀要 (51), 35-46
- 八重樫牧子(2020)「就学前親子の子育て不安と居場所ニーズ：A市の就学前親子の居場所に関する質問紙調査より」新見公立大学紀要 41, 37-47
- 八重樫牧子・奥山清子・林基子・本保恭子・小河孝則(2001)「母親の就労が女子大生の就労観や子育て観に与える影響について」川崎医療福祉学会誌 11(2), 245-253
- 山口咲奈枝・遠藤由美子(2009)「低出生体重児をもつ母親と成熟児をもつ母親の育児不安の比較：児の退院時および退院後1ヵ月時の調査」母性衛生 50(2), 318-324
- 山本理絵・神田直子(2011)「子どもの特性とQOL及び母親の子育て不安の関連に関する研究：「第5回愛知の子ども縦断調査」結果分析より」人間発達学研究 (2), 29-41
- 山瀬範子(2002)「幼稚園児の親にみる育児観：父親と母親の比較を通して」九州大学教育社会学研究集録 (4), 79-98
- 吉本文子(2019)「完璧」を目指す選択と評価のはざままで—専業主婦の母親の子育て観を中心に— 共栄大学研究論集 (17), 99-113